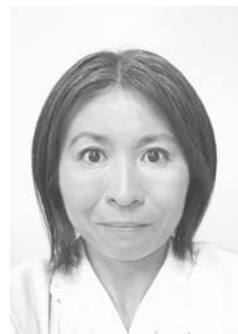


Ⅱ 特別シリーズⅡ

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプラン』 友情と感激

第205回

久留米高専の活動報告



菺田智恵子
(久留米高専
一般科目准教授)

タイの大学生のプレインターン
高専生とタイ留学生との共同演習

タイ・キングモンクット工科大学ラカバン（KMITL）は1964年に創設されたタイの国立大学です。現在は工学部、情報学部などの9学部と2つのカレッジがあり、学生数約2万5000人を有しています。学生の男女比はほぼ同じです。大学名のキングモンクット（モンクット王）は、現チャクリー王朝の第4代の国王（ラーマ四世）です。大学の前身が電気通信訓練センターであること、また、1982年にタイ国内で初の電気工学分野の博士課程を設立したことから、特に電気電子・通信・情報分野で有力な大学として知られ、国際協力機構（JICA）が支援するアセアン工学系高等教育ネットワーク（AUN/SEED-Net）のICT分野でホスト大学を担っています。

国立高専機構とKMITLは、2011年1月に学術交流に関する包括協定を、同4月に学生交流に関する覚書を交わしました。2017年3月には、本校とKMITLの情報学部が、学士／修士並行プログラムに関する合意覚書を締結しています。

2019年度、KMITLの学内に高専（KOSEN | KMITL）が開校し、5月12日に初年度24名の入学式が行われました。この24名は応募者数306名から筆記試験と面接を通じて選抜されています。

カセサート大学（KU）はタイ国内ではタマサート大学、チュラロンコン大学に次ぐ総合国立大学として知られており、1943年に農業大学として創立しました。タイ国内で3番目に古い歴史を有し、現在は7キャンパスにて約6万7000人の学生が学んでいる、タイでは最大規模の大学です。また、2012年から17年までは九州・沖縄地区の大学間連携共同教育推進事業（高専・企業・アジア連携による実践的・創造的技術者の養成

プログラム	1日目	到着、オリエンテーション
	2日目	留学生インターン受入研究室にてインターン留学生および高専生を交えた共同演習
	3日目	トヨタ自動車九州宮田工場および安川電機ロボット工場見学
	4日目	午前： 機械工学科4年および材料システム工学科4年（大学1年相当）との英語によるディスカッション 午後： 福岡県青少年科学館見学、学生会によるクラブ活動見学（プログラミングラボ部・ロボコン部・剣道部・合気道部） 夕方： 歓迎パーティー
	5日目	午前： 専攻科2年（大学4年相当）とのディスカッション、5年制御情報工学科専門科目「信号処理」の英語講義の聴講 午後： ものづくり教育センターの見学
	6日目	午前： 5年機械工学科・専攻科1年との英語ディスカッション 午後： 修了書授与式
	7日目	福岡空港にてお別れ

成・通称9高専連携事業を通じて、多数の学生派遣・受入を通じて交流を深めてきました。

◎ものづくりを介した
タイと日本の学生の相互交流

2019年6月30日～7月6日の7日間、さくらサイエンスプランの支援を受けて、（KMITL）から情報学部生4名と引率教員1名、同じくタイのKUから情報学部生3名の合計8名を久留米高専に招きました。久留米高専では、2014年度にさくらサイエンスプランが採択されて以来、さくらサイエンスによるタイからの大学1・2年生約8名の招聘に始まり、日本学生支援機構（JASSO）の支援によるKMITLやKUなどのタイの大学3・4年生を中心とした留学



ロボコン部の学生との交流



ラボツアーで質疑応答を交えながらプレゼン



全員で記念撮影



英語のクラスでのディスカッション

この度のさくらサイエンスプランでの交流を通じて、9月には久留米高専の学生8名を1週間、KMITLに受け入れていただくことが実現しました。プログラムを通して、タイと日本の学生の相互交流の場を与えていただきましたことを心より感謝申し上げます。

学生主催の折り紙パーティーでは、歓迎紙を体験してもらうなど日本の伝統文化に触れてもらいました。さらには、本校の工学教育の基盤でもある「ものづくり教育センター」を訪れ、旋盤やフライス盤、ホブ盤などの工作機械を間近で見学しました。学生実習の機材に直接触れることで、タイの学生たちは日本の高専におけるものづくり教育の現場を肌で感じる事ができました。また、久留米市にある福岡県青少年科学館のほかトヨタ自動車九州㈱の自動車工場と㈱安川電機の工場見学も実施しました。留学生らはロボットがロボットを作る日本の技術水準の高さに目を見張っていました。

生約20名を2〜5カ月の期間、研究を目的としたインターン生として受け入れるという一連の流れが定着しました。このさくらサイエンスでのプログラムの第一の目標に、本校での交流を契機として、より長期のインターンや学生として再来日してほしいとの願いがあります。そのため、タイ留学生が研究している姿を実際に見てもらおうと研究ラボツアーを企画しました。タイ留学生が自らプレゼンを行い、自身の研究プロジェクトを説明しました。

プログラム中の話題については、いかにも情報学部学生らしく専門用語が飛び交い盛り上がりを見せていました。タイにおける交通事情としてバイクが道路にあっていく学生が交通手段にもなっているそうです。日本のメーカーのバイクはタイで人気らしく、当節の若者らしい話題に花を咲かせました。また、本校の情報工学科5年(大学2年相当)の講義を英語で行うことで、久留米高専の実際の授業を肌身で触れてもらうことができました。

次の目標としては、本校の学生を、KMITLやKUに送り出すことであり、本校の学生との交流の機会を多く企画しました。タイからの大学1〜2年生と同学年に近い本校の学生とが英語の授業5クラス(1クラス90分)に参加し、テーマを決めてディスカッション

また、ロボットコンテスト部やプログラミングラボ部では、タイー日本両国の学生が参加したプログラミングコンテストでのお互いの作品について白熱した議論を交わしました。